

女性医師の窓

思うこと

金沢大学附属病院 呼吸器内科 阿保 未来

最近、休日の朝は浅野川沿いを走っている。

3 kmの程度の距離だが、だんだん楽に走れるようになってきた。

夢は5 kmまたは10kmの市民マラソンに出場すること。フルマラソンは夢のまた夢、息も上がるが、何よりも足腰が痛くなって今のところそれ以上は継続困難だ。

この原稿を書くにあたって、自分の趣味や興味のあることについて考えてみた。

ところが趣味といわれるものが何もないことに気づき、愕然とした。毎日仕事に行き、帰宅後すぐに夕飯の準備。夕飯の後片付けをすともう寝る準備だ。平日はそれで手一杯。休日はたまった家事をこなすのでアツという間に過ぎ去ってしまう。

唯一自分の自由な時間は週末早朝のジョグタイムだ。走り初めの体が動かない間は膝が痛くてつらいな〜と思うのだが、そのうちだんだん体が慣れてきて手足が勝手に動き始めると、自然にバックミュージックが浮かんでくる(iPodなどモバイル音楽プレーヤーは使い慣れないので、音楽は自前だ)。周囲にひと気がなければ、声に出して歌ってしまっている。

苦しいランニングだが、たまにご褒美もある。

桜の開花だ。まさに満開の時、桜の並木の下を走ると周囲に祝福されている気がする。

たかだか20~30分の間だが、とても貴重な大事な時間だと思う。

今年の4月から一念発起して一医員(研修医?)として大学病院で働いている。

今まで「母親医師」として半人前の働きが長く、このまま半人前で終わるのかな…と思っていた時期もあった。

私は長女を3年目の春に出産した。医師としてスタートラインについたばかり、まだまだいろいろなことがやりたい時期の出産で、このまま何もできなくなってしまうのか…とあせった。それでも長女だけの時は自分の親を中心に家族にさんざん迷惑をかけて何とか当直も輪番も乗り越えてきた。しかし10年前、息子ができた後はもはや親にも頼れず、いわゆる「母親医師」として時短で雇用していただき、外来中心で働くことになった。

若いときにある程度仕事に専念できていたら、子供ができた後はスムーズに家庭にシフトできたのだろうけれど、私の場合やりたい盛りのころに子育てに時間を割かなければならなかったため、「まだ何もできていない」という思いがいつもつきまとっていた。それが息子が10歳になったこのタイミングにとうとう爆発した形だ。「やるならもう最後のチャンス」と思い立ってしまい、大学に戻していただいた。

しかしよく考えてみれば、すでに4×歳。最後とはいえ十分遅すぎる年代だ。同期はそれぞれの場所で中心的なポジションに着いている。20歳近くも若い若者と一緒に患者のプレゼンなどしていると「自分はなにやっているんだ…」と思うこともしばしばだ。

それでも若者と一緒に病棟でワイワイやっていると、医者になりたての1、2年目の感覚がよみがえり、あのころの辛くも楽しかった毎日を思い出すことができる。意味もなく夜中まで医局にいたり、泊まってみたり…自由で一所懸命で贅沢な時間だった。また一人で外来をやっていた時には得られなかった新しい知見などに触れることができ、いくつになっても新しいことを学べるこの仕事を本当にありがたいと思う。

私は人に比べればひどく回り道をしているようだが、その分なかなかできない経験もできているのかもしれない。

これからもますます、いくつになっても若いつもりで走っていきたい、と思う。